

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1989.08.31	東京都	天然物質のアルカロイド系毒物		料理店経営者が宅配便のくずもちを食べた直後に体がしびれて倒れ死亡。子供も重体になったがその後回復。くずもちのきな粉の袋が取り替えられており、きな粉から植物性の天然毒物が検出された。	1名死亡、1名重症。		3	殺人・傷害事件
1990.01.31	新潟県	シアン化カリウム	毒物	研究施設の事務室で職員が朝のミーティングの際に茶やコーヒーを飲んだところ、数人が「渋みと苦みがある」などとして吐き出した。やかんに残っていた湯からシアン化カリウム検出。同月12日にも職員数人が朝のお茶に異臭を感じ、吐き出していたことがわかった。		この研究施設では水質検査にシアン化カリウムを使っていた。ふだんは、実験室内のカギのかかるロッカーに保管されているが、かきのあたりには職員も知っていた。(これが犯行に使われたものかどうかは不明)	3	毒物混入事件
1990.02.04	埼玉県越谷市	シアン化ナトリウム	毒物	大手スーパーに「店内に毒物を置いた」と現金を要求する電話があった。食料品売り場にビニール袋に入った白い粉が置いてあり分析したところ、シアン化合物とわかった。翌日容疑者逮捕。			3	企業脅迫
1990.05.24	大阪府豊中市の市立中学校	有機リン系の殺虫剤		中学校でやかんに入っていた生徒の昼食用のお茶に農薬が混入されていた。お茶の色が白く濁り刺激臭がしたため、すぐに気付き被害はなかった。			3	毒物混入事件
1990.12	東京都	酢酸タリウム	劇物	大学の動物実験施設の研究室で、職員が酢酸タリウムの水溶液入りの飲み物を飲み、帰宅後手足のしびれを訴えて入院。1991年2月にタリウム中毒によるとみられる腎不全などで死亡。解剖の結果、酢酸タリウムが体内から検出された。同僚の職員が1993年7月に逮捕された。	1名死亡	同施設では抗菌剤等として酢酸タリウム使用。容疑者はこの管理も担当していた。1990年11月頃、同施設が仕入れたはずの酢酸タリウムの薬びん一本が紛失しており、これを犯行に使ったとみられている。	3,21	殺人・傷害事件
1990.12-1991.01	佐賀県	ヒ素化合物	毒物	男性が同窓会場に持ち込んだビール瓶の中からヒ素が検出され、同級生大量殺害を計画したとして逮捕された。			3	殺人・傷害未遂事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1991.01.18	東京都	シアン化カリウム	毒物	会社社員が、同社社長らに脅迫状とシアン化カリウムを同封して送りつけ現金を脅し取ろうとした疑い。この男性はその6年前にこの会社の倉庫に侵入し、シアン化合物を盗み出していた。			3	企業脅迫
1991.02.08	東京都	農薬		大手食品メーカー本社に「東京都下のスーパーで製品に農薬を混入した」という電話があり、調べたところ、同社の商品に強い臭気があったため回収するとともに警察に届け出た。			3	企業脅迫
1992.11.20	東京都	マラチオン、NAC、DCPA	劇物(NAC)	小学校で配膳担当の職員がソース差しから刺激臭がするのに気づき、さらにびん入りのしゅうゆの量が増えているのを見つけた。分析の結果、殺虫剤と除草剤が検出された。			3	毒物混入事件
1992.夏-1993.10	大阪府	筋肉弛緩剤		男性3人が1992年夏、女性2人が1993年10月に連続失踪。いずれも愛犬家であり、5人の知人である自称「犬の訓練士」が1994年1月に逮捕された。1994年1月から2月にかけて5人の遺体が発見された。いずれも筋弛緩剤(塩化スキサメニウム注射液)の注射で殺害された。	5名死亡	知人の獣医師から入手	3,21	殺人・傷害事件
1993.04-1993.08	埼玉県	硝酸ストリキニーネ	毒物	県内の愛犬家ら4人が連続失踪。1995年1月に犬猫繁殖販売業の男性らを逮捕。	4名死亡	知人の獣医師から入手	3,21	殺人・傷害事件
1994.06.27	長野県	サリン		6月27日深夜、松本市の住宅街で数十世帯の住民が目の前が暗くなったり、せき込んだりといった症状を訴えて倒れ、救急車で病院に運ばれた。7名が死亡、重軽傷者は入院患者56人など約590人に達した。死亡者は総てアパートの住民で、2階2名、3階4名、4階1名と高い階に集中していた。その後の検査で原因物質がサリンと判明した。	7名死亡、重軽傷者約600名	オウム教回施設内で製造。	3,36,37	テロ、オウム真理教関連事件
1994.09.20	横浜市	ホスゲン	毒物	オウム真理教問題の取材や評論活動をしている女性の自宅に刺激臭をとまなうガスが撒かれ、女性が目やのどに痛みを訴えた。その後の調べによればオウム真理教団の2名がホスゲンを、玄関ドアの新聞受けから室内にまいた。			3	殺人・傷害事件、オウム真理教関連事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1994.12.02	東京都	VXガス		駐車場経営者が自宅で突然気が悪くなって倒れ、病院に入院した。その後の調べで、オウム真理教信徒にVXガスを噴きかけられたことがわかった。	1名入院	オウム教団施設内で製造。	3	殺人・傷害事件、オウム真理教関連事件
1994.12.12	大阪市	VXガス		会社員が路上で突然倒れ、入院先で死亡した。血清鑑定の結果、血中でVXガスが分解される際にできる化合物「モノエチルメルホスホン酸」を検出。オウム真理教団メンバーが逮捕された。	1名死亡	オウム教団施設内で製造。	3	殺人・傷害事件、オウム真理教関連事件
1995.01.04	東京都	VXガス		「オウム真理教被害者の会」会長が自宅の駐車場へ行き自室に戻った後、視界の暗さを覚え目の焦点が定まらなくなってきた。また救出にあつた東京消防庁職員などへの二次被害もみられた。	1名入院	オウム教団施設内で製造。	3	殺人・傷害事件、オウム真理教関連事件
1995.03.20	東京都	サリン		東京の地下鉄有楽町線有楽町駅など当団地下鉄3線の5本の電車内で、朝の通勤時間帯である午前8時過ぎ同時多発的にサリンが撒かれ、通勤客や駅職員などに多数の死傷者を出した。また救出にあつた東京消防庁職員などへの二次被害もみられた。	12名死亡、重軽傷者約5500名	オウム教団施設内で製造。	3,6,7,8,9	テロ、オウム真理教関連事件
1995.04.19	横浜市	催涙スプレー		横浜駅の地下通路や横浜東北線電車車庫内で異臭が発生し、通行客、降車した乗客らがのどの痛み、息苦しさ、脱力感などを訴えた。	通行人や乗客ら500人以上が病院で手当を受けた。		3,17	その他(スプレー)散布
1995.04.25	群馬県	クロルピクリン	劇物	中華料理店で食事客中の客と従業員50人近くが目やのどの痛みを訴え、4人が病院で診察を受けた。付近の土から農薬「クロルピクリン」を検出した。調べたところ、男性がクロルピクリンを処分しようとして自宅近くに捨てたらしい。毒劇物取締法違反の罪で略式起訴された。	4名病院搬送		3	その他(薬物)散布、過失
1995.05.05	東京都	シアンガス	毒物	新宿の地下の男子トイレにシアン化ナトリウムと希硫酸入り二つのポリ袋が置かれていた。時限発火装置で反応させてシアンガスを発生させようとしたもの。袋から火が出ているのを通行人がみつけ、職員が消火した。			3,17	テロ、オウム真理教関連事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1995.07.04	東京都	シアンガス	毒物	地下鉄茅場町駅の女子トイレごみ箱の中に液体と乾電池が入った不審なポリ袋があるのが発見され調べたところ、硫酸とシアン化ナトリウムを反応させてシアンガスを発生させる仕組みになっていた。			3,17	テロ、オウム真理教関連事件
1995.07.05	東京都	シアンガス	毒物	JR新宿駅の男子トイレの中で不審なポリ袋が見つかり、調べたところ、地下鉄茅場町駅で見つかったシアンガス発生装置と同型だった。			3,17	テロ、オウム真理教関連事件
1996.02.27	山梨県	シアン化合物	毒物	町内の大型ショッピングセンターに現金を要求する電話がかかり、トイレの洗面台から白い粉末が微量見つかった。鑑定の結果シアン化カリウムと分かった。清掃員の話では前日にもいくつかのトイレに同様の物質があったがゴミ箱に捨てたという。			3	企業脅迫
1996.07.01	青森県	クレゾール	劇物	公園の滑り台で遊んでいた小学生5名が手のひらやしりなごに痛みを訴え病院に運ばれた。全員クレゾールによるやけどを負った。滑り台の近からクレゾールが検出され、草むらからクレゾールせっけん液の表示のある空き瓶が見つかった。	5名病院に搬送。	公園内の売店で使っていたクレゾールせっけん液の瓶がなくなっていた。(これが犯行に使われたものかどうかは不明)	1,3	その他(薬物散布)
1996.10.31	東京都	催涙スプレー		中学校で授業中、刺激臭が発生。生徒が目や鼻に痛みを訴え、138人が病院に搬送され、うち症状が重かった8人が入院。	138人病院に搬送、うち8名入院。		3,17	その他(スプレー-散布)
1997.08.04	大阪市	催涙スプレー		スーパーで少年3人がスプレー缶からガスを噴出させ、店員や買い物客らがどの痛みやせき、手足のしびれなどの症状を起した。	12人が経過入院、いずれも軽症。		3	その他(スプレー-散布)
1997.09.02	郡山市	塩化第二銅	劇物	中学校で男子生徒が担任教師の給食のスプーンに、理科の実験で使った塩化第二銅をいたずらで混入、教師が下痢や腹痛を訴え市内の病院に入院。	1名入院	理科実験用試薬	3	毒物混入事件
1997.12.27	宮城県	パラコート	毒物	農家の主婦が蛇口から青色がかかった水が出たのに気づき警察に届け出た。井戸水からパラコート剤の成分が検出された。			3	毒物混入事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1998.02.02	茨城県	クロルピクリン	劇物	同じ町内の住宅4軒の周辺に薬物入りのペットボトルが置かれていた。1軒では家族がのどや目に異常を訴えた。ボトル内の薬物は4軒ともクロルピクリンと判明。			3	その他(薬物散布)
1998.02.20	埼玉県	催涙スプレー		JR大宮駅で、すりグループとみられる男性3人が逃走の際スプレーをまき、15人の乗客が目やのどの痛みを訴えて近くの病院に運ばれた。	15人病院に搬送。		3	その他(スプレー散布)
1998.03.22	愛知県	シアン化合物、ギ酸、アンモニア	毒物(シアン化合物)、劇物(ギ酸、アンモニア)	国立研究機関で研究員がインスタントコーヒーを飲んだ後吐き気や腹痛を訴え、救急車で病院に運ばれた。警察はその後コーヒー瓶の粉末と別の部屋のポットの湯からごく微量のシアンが検出されたと発表された。この研究室では、1997年9月にも異物混入騒ぎが起きており、1998年10月にはポットの湯にアジ化ナトリウムが混入されて4名が入院した。	1名病院に搬送。	この研究室では、保管庫に他の毒劇物とともにシアン化カリウムなどを入れている。これが犯行に使われたものかどうかは不明)	3	毒物混入事件
1998.07.25	和歌山市	亜ヒ酸等	毒物	自治会の夏祭り会場でカレーライスに毒物が混入され、飲食した参加者67名のうち、4名死亡、63名中毒症状。	4名死亡、63名中毒症状。		3	毒物混入事件
1998.08.03	山口県	高濃度のナトリウム(原因物質不明)		市内の洋菓子店でワッフル2個を買った男性が食べたところ、「舌に変な刺激を感じた。」と届けた。調べたところ、食べ残しや店にあった同商品など計3個から高濃度のナトリウムが見つかった。			3	毒物混入事件
1998.08.10	新潟市	アジ化ナトリウム	消防危険物(その後、毒物)	木材防腐加工会社新潟支店で、事務所の電気ポットの湯を使ったお茶を飲んだ社員10名が、直後からめまいや吐き気を訴え、病院に収容された。のみ残しのお茶からアジ化ナトリウムが検出された。	10名が病院に搬送、7名が入院。	新潟支店の倉庫にあった瓶入りの薬品を使用。	3	毒物混入事件
1998.08.15	鹿児島県	パラコート、ジクワット	毒物(パラコート)、劇物(ジクワット)	親から叱られたことに憤慨し、付近の3世帯が飲料水に使用している簡易水道タンク内に農薬を混入。			3	殺人・傷害事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発現場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1998.08.23	新潟県	殺虫剤	消防危険物	市内の寺境内において、参拝者が自由にお茶を飲めるように用意されていた電気ポット内に殺虫剤が混入された。ポットの湯を飲んだ人なし。			3	毒物混入事件
1998.08.26	東京都	クレゾール	劇物	中学校の生徒らに、「やせ薬」と称して合成樹脂製容器に入ったクレゾール入り液体が郵送され、3年生の男子が飲んだところ、意識もうろうとなり病院に搬送された。	1名入院。		3	殺人・傷害事件
1998.08.31	長野県	シアン化合物	毒物	スーパーで缶入りウーロン茶を購入し、自宅で飲んだ男性が倒れ病院に収容された後、死亡。缶の底に穴を開けるなど細工の跡。	1名死亡		3	毒物混入事件
1998.09.01	長野県	シアン化合物	毒物	スーパーの店長が、店内に陳列してあったウーロン茶缶が変形していたので取り除き、缶を開けて口に含んだところ、異常を感じ吐き捨てた。缶の底には穴が一つ開いており、半透明の接着剤のようなものでふさがれていた。	1名検査入院		3	毒物混入事件
1998.09.02	奈良県	DDVP(ジクロロポス)、DEP	劇物(DDVP、DEP)	タクシー運転手が、自動販売機で清涼飲料水1本を購入したが、商品取出口には2本出ており、その1本を口に含んだところ、異臭を感じ吐き出した。	1名検査入院		3	毒物混入事件
1998.09.03	大阪府	次亜塩素酸	消防危険物	男性がコンビニで紙パック入りの乳酸菌飲料を購入し、自宅で一口飲んだところ、異臭と喉の痛みを感じ吐き出した。この男性が自宅の漂白剤を入れたものと判明。		自宅の漂白剤	3	毒物混入事件
1998.09.04	大阪市	次亜塩素酸	消防危険物	女性がコンビニで紙パック入りジュースを購入し、自宅で飲んだところ、異臭と舌のしびれを感じた。家に置いてあった家庭用洗剤を自分で入れて飲んだもの。			3	毒物混入事件
1998.09.04	千葉市	農薬	劇物	男性が自動販売機で清涼飲料水1本を購入したが、商品取出口には2本あり、不審に思っ警察に通報。			3	毒物混入事件
1998.09.06	静岡市	サリチル酸フェニル、フェノリン		主婦がスーパーでペットボトル入りジュースを購入し、自宅で一口飲んだところ、喉のしびれ等を訴えた。狂言と判明。			3	毒物混入事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1998.09.06	大津市	洗剤		女性が、店から購入した缶入り茶に自宅で中性洗剤を入れて飲み、吐き気や舌のしびれを訴え、救急車で市内の病院に運ばれた。			3	毒物混入事件
1998.09.06	茨城県常陸太田市	洗剤		男性がコンビニエンスストアで購入したコーヒートン牛乳に、自宅で洗剤を入れて飲み、「気持ちが悪くなった」と店員に連絡。			3	毒物混入事件
1998.09.07	岐阜県中津川市	オイゲンロール、界面活性剤	消防危険物	社員食堂に置いてあったソースを使った5名の社員が、嘔吐や吐き気をもよおした。			3	毒物混入事件
1998.09.07	大阪市大正区	次亜塩素酸	消防危険物	主婦が「子供がコンビニで紙パック入りジュースを購入して飲んだところ、舌がしびれた」と申告。主婦が自宅にあった漂白剤を入れたことが判明。		自宅の漂白剤	3	毒物混入事件
1998.09.07	埼玉県鶴ヶ島市	シアン化ナトリウム	毒物	男性がコンビニエンスストアで紙パック入りコーヒートンを購入し自宅で飲もうとしたところ、薬品のような刺激臭を感じ警察に届け出。狂言と判明。			3	毒物混入事件
1998.09.07	長野県更埴市	ピレスロイド系殺虫剤		高校生が、自動販売機で清涼飲料水1本を購入したが、商品取出口に既にもう1本あり、その缶の底に穴が開いてポンド様のものが付いていた。狂言と判明。			3	毒物混入事件
1998.09.08	茨城県水戸市	クレゾール	劇物	男性が倒れているのを住民が見つけ、病院に運ばれた。高識がはきりせず重体。吐いた物と胃の内容物からクレゾールが検出。2人組の男に襲われクレゾールを飲まされたとのこと。	1名病院搬送		3	その他(不明)
1998.09.08	宮城	次亜塩素酸	消防危険物	女性がコンビニで紙パック入り紅茶を購入し飲もうとしたところ、異臭がした。			3	毒物混入事件
1998.09.08	静岡県	硝酸アンモニウム	消防危険物	男性が百貨店の食料品売場でペットボトル入りウーロン茶を購入し、近くの建物で保冷剤の中身の硝酸アンモニウム水溶液を混入。その後売場に持参して「変な味がする」と店員に訴えた。			3	毒物混入事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1998.09.08	福島県	有機リン系薬剤	消防危険物	男性が自動販売機でジュースを購入しようとしたところ、取出口に置かれている清涼飲料水の瓶を発見。色が違っており栓も開けられなかったような状態だったので警察に届け出。その後付近の自動販売機からも同様の瓶発見。			3	毒物混入事件
1998.09.11	大阪府	漂白剤	消防危険物	中学校の給湯室で作った麦茶を各クラスに分配し、1クラス10名が飲んだところ、異臭を感じた。同校の女子生徒が麦茶のやかんに漂白剤を入れたと断定。			3	毒物混入事件
1998.09.11	富山県	有機リン系農薬		自分の勤める社員食堂のソースやポットに有機リン系農薬を入れた。異臭がしたため従業員が気づいた。			3	毒物混入事件
1998.09.18	京都市	カドミウム(カドミウム)かカドミウム化合物かは不明)	カドミウム化合物の場合には劇物	大学院の研究室で電気ポットの湯を使った玄米茶を飲んだ学生や助手ら9名が吐き気などを訴え、病院に収容。玄米茶からカドミウムが検出された。	9名病院に搬送。	実験室には、液状のカドミウム化合物や、反応を速めるために使う粒状のカドミウムなどがあった。(これが犯行に使われたものかどうかは不明)	3	毒物混入事件
1998.09.21	大阪市	強アルカリ性洗剤		小学校で児童が配せん前にビンクに変色した牛乳を見つけた。検査の結果強アルカリ性の物質を検出。牛乳を納品している会社の元従業員が牛乳に入れたと供述。			3	毒物混入事件
1998.10.05	長崎県	農薬		女性が自動販売機でジュースを購入したが取出口には他に缶コーヒーもあった。自宅に持ち帰り翌日缶コーヒーの蓋を開けたところ異臭を感じた。缶コーヒーの横には、針で刺したような穴が開けられていた。			3	毒物混入事件
1998.10.05	福井県	トイレ用洗剤		男性がスーパーで紙パック入りコーヒーを購入し、自分でトイレ用洗剤を入れて警察に届け出た。			3	毒物混入事件
1998.10.12	茨城県	パラコート	毒物	男性が自動販売機で缶コーヒー1本を購入したが、取出口には別の缶コーヒー1本があり飲んだところきわめて気分が悪くなり、病院に収容。	1名病院搬送		3	毒物混入事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1998.10.16	三重県	アジ化ナトリウム	消防危険物(その後、毒物)	大学の研究室の電気ポットの湯でコーヒーや紅茶を飲んだ助教ら6名が、吐き気、めまい、動悸などの症状を訴え病院に収容。ポットに残っていた湯からアジ化ナトリウムが検出された。	6名検査入院	現場の研究室の薬品棚にあった瓶入りのアジ化ナトリウムと、電気ポットの湯から検出されたアジ化ナトリウムの純度が、ほぼ一致したと、警察が発表。ただし、量の増減に関する事件前の記録がないため、研究室のものが犯行に使われたかどうかは特定はできない。	3	毒物混入事件
1998.10.27	愛知県	アジ化ナトリウム	消防危険物(その後、毒物)	国立研究機関の休養室で電気ポットの湯を使用したお茶を飲んだ助教ら4名が気分が悪くなった。ポット内のお湯からアジ化ナトリウム検出。4人は吐き気、動悸、めまい、頭痛などを訴え、市内の病院に運ばれた。この研究所では1998年3月にもポットの湯を飲んで気分が悪くなる毒物があり、1997年の9月と11月にもウイスキー瓶への異物混入騒ぎがあったという。	4名入院	同研究所の休養室とは別の部屋から押収した瓶の中身を鑑定した結果、アジ化ナトリウムと確認した。使用量や人物などの記録は残っていない。(これが犯行に使われたものかどうかは不明)	3	毒物混入事件
1998.10.28	京都市	アジ化ナトリウム	消防危険物(その後、毒物)	国立療養所の病院休養室において電気ポットの湯でコーヒー、紅茶、日本茶等を飲んだ医師11人のうち、8人が吐き気やめまいなどの症状を訴えた。電気ポットの湯から微量のアジ化ナトリウム検出。	1名が病院で治療を受けたが症状は軽くその日のうちに帰宅。	アジ化ナトリウムは同病院で研究用の試薬として使用されている。厳重管理を求める厚生省通知はまた病院に届いておらず、同病院には錠剤がない薬品だけに置かれたままのアジ化ナトリウムもあった。(これが犯行に使われたかどうか不明)	3	毒物混入事件
1998.11.04	島根県	不明		中学校で給食を食べた生徒らが吐き気などを訴え、生徒35名と講師1名が一時入院。給食に出された食品などの検査を進めたが、原因物質は特定できなかった。	36人が一時入院		3	毒物混入事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害	入手経路や薬物の保管状況等	引用資料	種類
1998.11.06	愛知県	アジ化ナトリウム	消防危険物(七の後、毒物)	大学の薬品室からアジ化ナトリウムが入ったガラス瓶がなくなっていると、大学が警察に届け出た。同日夕、薬品室や実験室に不審な女性が入り込んでいた。この女性は7日、盗んだアジ化ナトリウムを飲んで自殺していることがわかった。 大学院生が、大学院生室のポットの湯を交換する際に異臭を感じ、警察に届け出。	1名死亡(自殺)	薬品棚の誤薬	3	その他(盗難)
1998.11.17	広島市	リグロイン	消防危険物	男性がシアン化カリウムをインターネット等を通じて知り合った7名に宅配便で送付(8名から代金受け取り)。東京都の女性が1998年12月に自殺目的でこれを飲んで死亡。この男性も1998年12月自殺していた。	2名死亡(自殺)	市内の医薬品卸会社や薬局で、「水の成分分析」や「研究のため」と偽って数回に分けてシアン化カリウムを購入。	3	その他(販売)
1998.12.23	宮崎県北諸郡	除草剤の可能性		男性が、作業場の一角で友人2人と酒盛りをしていて焼酎を飲もうとしたところ、一口飲んですぐ刺激臭を感じ、吐き出した。鑑定の結果、異物は除草剤の可能性が高い。			3	その他(不明)
1999.02.01	千葉県市原市	ストリキニーネ	毒物	男性がコンビニで紙パック入りコーヒー牛乳を購入後、自室で飲んだところ、嘔吐、痙攣の症状を訴え病院に搬送された。その後の調べで、狂言と判明。		大学時代に研究室から持ち出し、保管していた。	3	毒物混入事件
1999.02.09 (逮捕)	京都府	クロロホルム	劇物	大学院生の男性が、東京都内で起きた強姦未遂事件で逮捕された男性にクロロホルムを販売したとして逮捕された。インターネットのホームページでクロロホルムを販売していた。この男性はクロロホルムの一部を1997年から1998年にかけて在籍する研究室から持ち出したと供述。		一部は在籍する研究室から持ち出し。	3	その他(販売)
1999.02.23	京都府	クロロホルム	劇物	大学の図書室で卓上に置かれた電気ポットの湯から異臭がしたとの届け出があり、調べたところ電気ポット内の湯から微量のクロロホルムを検出。			3	毒物混入事件

表1 毒劇物等を用いた事件事例

参考:新聞データベース収載分以前(1984年8月以前)の事件例

発生日時	発生場所	混入物質	毒物・劇物等	概要	被害者、症状	引用資料	種類
1948.01.26	東京都	シアン化合物(シアン化カリウム)とされている。	毒物	概要 帝国銀行に「東京都防疫班」の腕章をつけた男が現れ、赤痢の予防薬とだまして胃酸カリ入り溶液を16名の行員に飲ませ、現金などを奪ったとされる。うち、12人名が死亡。	12名死亡、4名重体。	3,21	殺人・傷害事件
1974.11	広島県	アジ化ナトリウム	消防危険物(その後、毒物)	大学で紅茶を飲んだ助教授ら5名が中毒症状を起し病院に運び込まれた。アジ化ナトリウムは砂糖を入れた缶に混ぜていた。	3人病院に搬送。	3	毒物混入事件、または殺人、傷害事件
1977.01	東京都	シアン化合物	毒物	東京都港区の公衆電話ボックスなどに置いてあった胃酸入り入りコココーラを飲んだ高校生ら2人が死亡。(胃酸入りココラ事件)	2名死亡	3,21	毒物混入事件
1977.02	東京都	シアン化ナトリウム	毒物	東京駅八重洲地下街の通路で胃酸ナトリウムを混入したチヨコレート40箱が見つかる。(東京駅パレンタイムン、チヨコ事件)	なし	3	毒物混入事件

表2 周辺地域に影響が出た事故事例

発生日時	発生場所	原因化学物質	状況	被害者数	死亡者数	引用文献
1976.03.26	大阪府	塩素ガス	鉄線工場で、タンクローリーで運んできた硫酸を誤って次亜塩素酸ナトリウムタンクに注入したため、ガスが発生した。ガスは付近一帯に流出した。105人が病院へ収容され、15人が入院した。	105		38
1986.07.18	神奈川県	塩素ガス	メッキ工場でタンクローリーで運んできた重亜硫酸ナトリウムを誤って次亜塩素酸ナトリウムの入ったタンクに注入、塩素ガスが発生して付近に漏洩した。付近の住民ら12人がのどに痛みを訴えるなどして病院に運ばれ、工場の従業員3人も病院で治療を受けた。	15		3
1986.10.30	徳島県	塩素ガス	し尿処理場で、車で運んできた殺菌用の次亜塩素酸ナトリウムを誤って隣の塩化アルミニウム入りタンクに注入したため、塩素ガスが発生。職員1名が重体になった。付近の中学校生徒や住民を含む24名が被害を受けた。	25		40
1991.07.12	静岡県	塩素ガス	和紙工場でタンクローリーで運んできた塩化アルミニウム2トンを、誤って次亜塩素酸ナトリウムが14トン入ったタンクに注入、ガスが発生した。通行人、周辺住民を含む101名が被害を受け、うち10名が入院。	101		41
1995.01.08	埼玉県	塩素ガス	健康センター女子浴室隣の機械室で従業員が浴用剤の移替え作業中、誤って近くの浴槽消毒液の中にこぼした。入浴客50人のうち20人が喉の痛みや吐き気を訴え7人が入院。消毒液成分の次亜塩素酸ナトリウムと浴用剤から塩素ガスが発生し空調ダクトから浴室に流入したらしい。	20		42
1995.07.**	新潟県	酸化窒素	工場内産業廃棄物保管タンクに、回収してきた廃液を入れたところ、前の廃液の残渣と反応を起こし酸化窒素ガスが発生した。近隣の工場の作業員15名が目や喉の痛みを訴えた。	15		43
1995.09.12	福岡県	クロロピクリン	丘陵地の畑で土壌消毒のためクロロピクリンを注入作業中、風により付近の団地に流れ込み住民が目への痛みを訴えた。	13		1

表3 主な輸送事故事例

発生日時	原因物質	毒物・劇物等	発生場所	概要	被害者、症状	文献
1990.06.29	キシレン	劇物	市川市の首都高速湾岸線	タンクローリーに積んであったキシレンが路上に流れ出し、化学消防車などが出動した。		3
1990.07.13	硝酸とフッ化水素酸の混合液	毒物、劇物	山口県の中国自動車道	走行中のタンクローリー車から、半導体洗浄に使った硝酸とフッ化水素酸の混合液が漏れているのを、後ろを走っていた車が発見。フッ化水素酸が気化して、付近は黄色い煙と悪臭がたちこめた。町は付近住民に避難命令を出した。混合液が漏れ続けたため、消石灰による中和作業がはかどらず、道路が長時間にわたってストップした。		3
1993.04.01	クロルピクリン	劇物	岡崎市の東名高速道路 上	クロルピクリンを積載していた車両が交通事故で出火し、クロルピクリンの缶が膨張破裂したため、有毒ガスが発生。メーカーに処理を依頼したが、中和剤を使った処理が始まったのは事故発生から九時間後だった。事故の発生から約16時間半後に道路が全線開通した。	付近に駐車中の運転手ら2名が被害、うち1名がガスを吸って肺水腫のため死亡、他の1名は軽傷。近くの公園の職員らが頭痛などを訴え、動物も死んだ。また多数の消防職員も治療を受けた。	3,15,16
1997.08.05	脂肪酸クロライド		静岡県東名高速道路上	早朝、脂肪酸クロライドを積んだタンクローリーが横転した。タンクに亀裂が生じて脂肪酸クロライド(主にステアリン酸クロライド)が漏出した。これが雨水と反応して塩化水素ガスを発生させたため、中和作業に時間がかかるとして県内の東名高速は早朝から夜まで約15時間にわたって機能マヒに陥った。	運転手が重傷。	3,16
1997.09.19	キシレン	劇物	佐賀県の長崎自動車道	タンクローリーが横転し、キシレン約100リットルが流出。化学消防車などが出動。発火の恐れがあるため、事故直後から現場付近は約2時間通行止めになった。	なし	1,3
1997.10.21	フェニレンジアミン	劇物	焼津市の東名高速道路 日本坂トンネル内	トンネル内でタンクローリーが横転し、積んであった石油類が流出。物質名がフェニレンジアミンと特定できたのは事故発生から約2時間後で、回収作業に手間取った。	運転手が軽いが、レックカー会社の作業員が薬品に触れ、右手などに約二週間のやけど。	3

表4 外国の大規模事故事例

発生日時	発生場所	原因化学物質等	事故、事件内容	被害状況	引用文献
1974.06.01	英国、フリックスポロ	シクロヘキサン	英国ナイブプロ社のフリックスポロ工場で、パイプパイプのデザイン不良のためシクロヘキサンが急速に押し出されて空気に混合し爆発性の蒸気雲を形成、これが発火源によって爆発した。	建物が破壊され、従業員28名死亡、36名負傷。800メートル離れた近くの村でも多くの建物が破壊された。	13、58
1976.07.10	イタリア、セベン	ダイオキシシン、トリクロロフェノール他	イタリアのイクメサ社のトリクロロフェノールを扱う化学プラントで暴走反応が起こり、生成したダイオキシシンを含む化学物質(トリクロロフェノール、水酸化ナトリウム、エチレンジクロライド等)が大量に放出されて数キロメートル四方に広がった。	22万人以上に被害。吐き気、頭痛、塩素座瘡(chloracne)を引き起こした。約1800ヘクタールの土地が汚染された。長期の健康影響に関するモニタリングがずっと行われている。	10,11,13,25
1978.**.**	米国、フロリダ	塩素	貨物列車が脱線しタンク車がパンクして約50トンの塩素が流出し、塩素ガスによる濃霧が付近自動車道路にたち込めた。	8人の運転手が肺の損傷で死亡。23人は致死には至らない肺の傷害を患い、100人以上が被害を受けた。	25
1979.03.28	米国、スリーマイル島	放射能	米国ペンシルベニア州のスリーマイル島(TMI)にあった原子力発電所で、冷却水ポンプが故障し、運転員が緊急炉心冷却システムを止めるというミスも絡んで、冷却水が大量に失われた。炉心の半分以上が炉心溶融(メルトダウン)し、放射性物質を含む蒸気が大量に漏れた。		3,13
1984.12.02	インド、ボパール	メチルイソシアネート	ユニオンカーバイド社の殺虫剤製造プラントで、タンクの安全弁が破裂し非常に毒性の強いガスであるイソシアネート酸メチルとその反応物が大量に流出。プラントの周辺には多くの人が住んでおり多数の被害者が出た。	約2000人以上が死亡。被害者総数は約20万人前後といわれている。	3,4,11,13,25
1985.08.11	米国ウエストバージニア	アルジカルブオキシム、メチルクロライド等	ユニオンカーバイド社の殺虫剤工場から、アルジカルブオキシム、メチルクロライド等の有毒物質が流出。工場の作業員や付近の住民らが被害を受けた。	負傷者135名	

表4 外国の大規模事故事例

発生日時	発生場所	原因化学物質等	事故、事件内容	被害状況	引用文献
1986.08.21	カメルーン、ニオス湖	二酸化炭素、亜硫酸ガス、硫化水素など	カメルーンの火山湖であるニオス湖で、火山作用によってガスが噴出し、近くの村の住民多数死亡。	2000人余りが死亡。生存者は数時間意識を失い多くは水泡を生じた。ガスの正確な組成は不明だがおそらく二酸化炭素、亜硫酸ガス、硫化水素などであり、死亡原因は主に大量の二酸化炭素による酸欠と考えられている。	3,6,25
1986.04.26	ソ連、チェルノブイリ	放射能	旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所で火災が発生し、炉心溶融で放射能が漏れた。	ソ連代表がチェルノブイリ原発事故について、「死者は事故発生時の2人と放射能による25人」と発表。事故後多くの住民が疎開した。	3,13
1989.03.24	アラスカ沖	原油	アラスカ沖でタンカー「エクソン・バルディーズ号」が座礁。船底に穴があき、原油24万バレルが流出。原油除去作業が難航し、環境に大きな被害が出た。	動植物をはじめ、環境に大きな被害が出た。	3,4,7
1992.03.24	セネガル、ダカール郊外	アンモニア	ピーナッツ加工工場のアンモニアタンクが爆発。17トンのアンモニアをトラックからタンクに移すところを、不注意により2トン注入したため。	90名死亡、約350名負傷	3,4,5
1992.04.22	メキシコ、グアダハラハラ	ノバ・ガソリン、ヘキサン	メキシコ、グアダハラハラの市下水道で連続的な爆発があり、道路や建物が崩壊するなどして多数の死傷者が出た。地下パイプラインから漏れた大量のノバ・ガソリンと少量のヘキサンなどが一連の爆発を起こした。爆発の前からガス臭があり警察や消防に通報していたが、何の対策もとられていなかった。	少なくとも200名死亡、1000名以上負傷、犠牲者は約1万人。損傷した建物は1000戸以上とみられる。	3,4,6
1993.08.05	中国、深セン経済特区	硝酸系化学薬品(?)	化学薬品の倉庫が爆発し、他の倉庫も次々と爆発。従業員の中に最初の爆発の消火や救出作業にあたった消防団員、警察官らが多数死亡した。倉庫には硝酸アンモニウムなどの各種化学薬品や燃料なども保管されていた。中国ではこの年、他にも工場での火災・爆発が相次ぎ、いずれも数十名から百数十名が死亡している。	死傷者は150人以上ともいわれているが不明。	3

－ 別添 3 - 2 －

厚生科学研究費補助金分担研究報告書

**日本中毒情報センターにおける毒劇物
等中毒事件への対応および諸外国の
中毒情報センターにおける対応**

1998年度厚生科学研究費

厚生科学特別研究事業

分担研究者 黒木由美子

((財)日本中毒情報センター本部事務局)

厚生科学研究費補助金（厚生科学特別研究事業）
分担研究報告書

日本中毒情報センターにおける毒劇物等中毒事件への
対応および諸外国の中毒情報センターにおける対応

分担研究者 黒木由美子 (財)日本中毒情報センター 企画調整係長
研究協力者 田村満代 (財)日本中毒情報センター
後藤京子 (財)日本中毒情報センター
大橋教良 (財)日本中毒情報センター

研究要旨

本研究では、毒劇物を含む化学物質の管理体制の強化、および中毒事件/事故の対応強化のために、現状の問題点を明らかにすることを目的として、平成10年に(財)日本中毒情報センター(JPIC)で受信した毒劇物を含む化学物質による中毒事件/事故などの受信状況および対応の調査、さらに、海外の中毒情報センターにおける化学物質中毒事件/事故の受信状況および対応の調査を行った。

JPICの実態調査の結果、JPICでは和歌山毒物混入カレー事件(1事件)に係わる問い合わせ13件、アジ化ナトリウム混入事件(3事件)に係わる問い合わせ7件、催涙スプレーによる事件/事故(14事件/事故)に係わる問い合わせ17件、このほかに医療機関、保健所、学校などから事件/事故に係わる問い合わせ32件を受信していた。現状では化学物質の入手経路や分析経緯などは把握できなかったが、中毒事件/事故時には早期にJPICに問い合わせがあるため、JPICの人的・質的な機能強化を行ない積極的に追跡調査を行えば、化学物質の入手経路、事件/事故の発生状況、臨床症状、分析結果など毒劇物を含む化学物質の管理体制の強化、および中毒事件/事故の対応強化のため情報収集が可能であると考えられた。また、JPICに問い合わせがあった中毒事件の中で、緊急に規制を考慮すべき化学物質として催涙スプレーがあげられた。

一方、平成10年の中毒事件の際、JPICの中毒情報提供自動FAXシステム、インターネットのホームページにあるニュース覧での中毒情報提供、海外との協力体制は、有効な情報伝達手段として活用された。特にホームページのニュース覧は、海外の中毒情報センターでは未だ類をみず、集団中毒事件/事故では、いち早く、かつ、広く情報を提供できる有効な手段である。これらの内容の充実と、それを継続維持できる体制の強化および支援が重要である。

JPIC実態調査から、JPICは人的・質的な機能強化をさらに行えば、毒劇物を含む化学物質の中毒事件/事故時に情報提供・収集の双方向機関として重要な役割を果たせる機関になり得ると考えられた。

海外の中毒情報センターの実態調査の結果、イギリスでは化学災害時にChemical Incident Response Serviceが中心となり、中毒情報センター、分析センター、医療機関、行政など各関連機関や各専門医・疫学者・化学者などへ情報提供・収集・連絡調整するシステムが確立していることが明らかになった。このシステムは化学災害時に有効に稼働していた。日本においても、集団中毒事件/事故に対応できる情報提供・収集・各関連機関の連絡調整の中心なる組織とシステム作りが必要である。また、JPICは機能強化を行えば、その中心となり得る機関の候補の1つであると考えられた。

A. 研究目的

平成10年には、7月に和歌山毒物混入カレー事件、8月に新潟県をはじめとする一連のアジ化ナトリウム混入事件など集団中毒事件が起こり社会的な問題となった。さらに、長野県で缶入り飲料にシアンが混入され死亡者がでた中毒事件以来、飲食物に薬毒物を混入するといった事件が未だ相次いでいる。これらの事件は原因物質が不明であったため、原因物質の同定には時間を要し、解毒剤の投与などの患者の治療が遅れた。また、判明した原因物質は毒劇物を含む化学物質であったため、これらの管理体制が問題となった。さらに、集団中毒事件時の救急隊、警察、病院、分析機関、行政などの連絡体制も未だ確立されていないため対応が遅れ、治療のための重要な情報が医療サイドに円滑に提供されないのが現状である。

財団法人日本中毒情報センター(JPIC)は、化学物質や動植物の成分によって起こる急性中毒について、その治療に必要な情報の収集と整備、ならびに問い合わせに対する情報提供などを行い、わが国の医療の向上を図ることを目的として設立されたわが国唯一の機関であり、このような社会的な薬毒物事件の際にも多くの医療機関、一般市民、また保健所、消防、薬局などその他の機関から中毒の治療に関する情報提供を求めらるため、多くの中毒事件/事故の発生を早期に把握できる機関のひとつである。

本研究では、毒劇物を含む化学物質の管理体制の強化、および中毒事件/事故の対応強化のために、現状の問題点を明らかにすることを目的として、過去の毒劇物を含む化学物質の中毒事例の実態調査を行った。具体的には、JPICに平成10年に問い合わせられた毒劇物を含む化学物質による中毒事件/事故などの問い合わせの状況およびJPICの対応の実態調査、さらに、海外の中毒情報センターにおける化学物質中毒事件/事故の問い合わせ状況および対応の実態調査を行った。

B. 研究方法

1. 平成10年にJPICで受信した化学物質による事件/事故に関する実態調査

JPICで記録した電話受付登録用紙(別紙1)と追跡調査用紙(JPICで興味をもった症例に対し医療機関に送付し、回収できた症例のみ)(別紙2)から、化学物質による中毒事件/事故について、以下の4つに分けて調査した。また、一部は新聞記事などから事件/事故状況の補足を加えた。

- (1)和歌山毒物混入カレー事件に関する問い合わせ状況とJPICの対応
- (2)アジ化ナトリウム混入事件の問い合わせ状況とJPICの対応
- (3)催涙スプレー事件/事故の問い合わせとJPICの対応
- (4)その他の化学物質、不明物質による事件/事故の問い合わせとJPICの対応

2. 海外中毒情報センターの実態調査

イギリス、フランス、スウェーデンの中毒情報センターにおいて、化学物質による事件/事故の問い合わせデータがあるかどうか、また、データがある場合その詳細について調査した。さらに、病院、分析機関、行政など他機関との連絡体制などについて訪問時に調査を行った。

C. 研究結果

1. 平成10年にJPICで受信した化学物質による事件/事故に関する実態調査

- (1)和歌山毒物混入カレー事件に関する問い合わせ状況とJPICの対応
和歌山毒物混入カレー事件における、事件および各機関の動き(新聞報道などより)、およびJPIC問い合わせの状況を時間経過とともに、表1-1、表1-2にまとめた。

事件発生の翌日に4病院と保健所から青酸中毒について問い合わせがあった。第1報では、青酸が検出されたこと、患者の症状は嘔吐、下痢、血圧低下、発熱であること、30人近く患者がいる集団中毒であることが把握でき、電話応答とFAXにより青酸中毒の情報を提供した。次に保健所から「青酸の資料を各病院にFAXしたい」という要請があり、JPICではそれに対応した。しか

し、その後、病院や保健所からは患者の詳細な症状や経過についてはJPICへは情報は集まっていない。

事件から4日目(7/28)に厚生省経由で白血球数が減少した患者が3人いることがわかった。事件7日目(7/31)にJPICからWHOに青酸の解毒剤の副作用または青酸中毒で「汎血球減少症」の経験の有無を電子メールで尋ねた。WHOからは青酸の解毒剤の資料が送られ、さらに、患者の症状の詳細が尋ねられた。しかし、JPICで把握している症状はわずかであり、この件については返答はできなかった。

事件9日目(8/1)にヒ素であったことが判明し、保健所、病院からヒ素資料の請求があり、電話対応とFAXで情報を提供した。事件10日目にWHOにヒ素であったことを連絡した。そしてWHOから返信では、7/31の時点で「汎血球減少症」からヒ素中毒ではないかという示唆がアラン・ホール博士からWHOには届いていたことを知らされた。中毒情報センターに患者の症状、経過の情報が集まるシステムになっていれば、あるいは、追跡調査がすぐに行えるマンパワーがあれば、WHOからもっと早く、ヒ素中毒の可能性のコメントを提供してもらえたのではないかと考えると残念な事例であり、連絡調整体制の強化が求められた。

なお、医療機関や行政などから「中毒時に備えたい」ということで青酸、ヒ素中毒に関する問い合わせがJPICに殺到したため、事件5日目(7/29)にインターネットホームページ上のニュース覧に「青酸中毒資料」を、さらに、ヒ素と判明した翌日(事件10日目、8/3)に「ヒ素中毒資料」掲載した。また、賛助会員の医師、医療機関に対しては、自動FAXシステム(FAXボックスから中毒情報を取り出すシステム)により青酸、ヒ素の中毒情報がとりだせる体制であった。その後、患者の追跡調査を行い、数例が回収されている(本研究では未収載)。

(2) アジ化ナトリウム混入事件の問い合わせ状況とJPICの対応

アジ化ナトリウムの事件は3事件4医

療機関7回の問い合わせがあった。その詳細を表2-1と2-2に示した。入手経路は、工場内、職場内にあった試薬が使用されたようであった。分析は、警視庁科学警察研究所や県科学捜査研究所で行われていた。

JPICの対応は、8月の最初の事件の際、まだアジ化ナトリウムと判明していない時点では、青酸の可能性があるので、医療機関から請求された青酸やヒ素の資料をFAXした。その翌日、アジ化ナトリウムと判明したため、アジ化ナトリウムの資料を自主的にFAXした。そのほかに行政や病院からも資料の請求があったため、インターネットホームページのニュース覧に資料を掲載した。追跡調査は、3件中2件が回収でき、症状の詳細などについて患者ごとのデータも収集できた(本研究では未収載)。

(3) 催涙スプレー事件/事故の問い合わせとJPICの対応

催涙スプレーまたは催涙と考えられた不明のスプレーの問い合わせは、14事件17件に昇り、1年を通して問い合わせがあった(表3-1、3-2)。この中には、2月に大宮駅前(十数人)、11月に兵庫県(22人)で起こった集団中毒事件が含まれている。そのほか、突然何者からか催涙スプレーをかけられたという事例が多かった。入手経路はすべて不明であり、分析が警察で行われていることがわかった例は2例のみであった。

JPICの対応は、電話応答およびFAXによる情報提供であり、追跡調査は5例行っていた。追跡調査が行われている場合は、発生状況の詳細や、その後の症状や治療の様子、分析有無などが把握しやすかった。なお、催涙スプレーについては、ホームページでは情報提供は行っていない。

(4) その他の化学物質、不明物質による事件/事故の問い合わせとJPICの対応

その他の化学物質や不明物質による事件/事故に係わる医療機関・その他からの問い合わせから主なもの32件を表4-1、4-2にまとめた。やせ薬と称して

郵送されたクレゾールの事件や、旅館の食事や学校給食へ消毒薬や何か化学物質が混入された集団事件などが問い合わせされた。また、9/3に報道発表された缶入り飲料に青酸が混入され死亡者がでた中毒事件以来、飲食物に薬毒物を混入された、または、されているのではないかという事例が相次いで問い合わせされている。化学物質の入手経路がわかった数例では、家庭内、職場内、学校内においてあった身近な化学物質であった。また、分析または分析予定がわかったのは3件のみであった。

JPICの対応は、原因物質が判明しているものについては、電話応答およびFAXによる情報提供であり、追跡調査は行えていなかった。また、原因物質が不明なものについては、症状からの原因物質検索システムが未だ検討中であるため、情報提供は行っていない。

なお、このほか一般市民からも飲食物の味が変で、気分が悪いといった問い合わせを数多く受信し、医療機関への相談を勧めている。

2. 海外中毒情報センターの実態調査

(1) ロンドン中毒情報センターおよびChemical Incident Response Service

イギリスのロンドン中毒情報センターがあるGuy's and St Thomas Hospital Trust(財団)のMedical Toxicology Unitには、ロンドン中毒情報センターのほかに分析センター、Chemical Incident Response Serviceなどの組織が存在する。この中でChemical Incident Response Serviceは、化学災害時に必要に応じて医師、行政などの関連施設へ情報提供を行っている組織である。専任の医師2人を含む8人の組織で24時間連絡がとれる体制になっている。イギリス全土の人口5,826万人をカバーしているが、イングランドのPublic Health Doctorが配置されている地域を8カ所(各500~700万人程度)とイングランド以外のその他の地域(ウェールズとスコットランド)の計9カ所に分けて対応している。

① 問い合わせ状況

化学災害の定義は、「2人以上が化学

物質(放射線物質を除く)の急性暴露により症状が発現した場合、または2人以上に化学災害によると思われる類似の症状が発現している場合」である。

1998年には917件の化学災害が医療機関や医療関係者など報告された。その地域別、事件/事故の種類別、化学物質別の統計をそれぞれ表5、6、7に示した。

表5 地域別統計

Anglis & Oxford	157件
North Thames	184件
North West	121件
South Thames	172件
South & West	127件
Trent	76件
Northern & Yorkshire	25件
West Midlands	15件
Other areas outside of England	40件

表6 事件/事故の種類別統計

漏えい(Leak)	31%
流出(Spill)	17%
大気	13%
飲食物、医薬品	10%
C S(催涙ガス)	6%
火事	5%
水	4%
土壌	4%
廃棄物	3%
悪意(Malicious)	2%
運送	1%
爆発	1%
その他	1%
不明	2%